

## 終末期医療に関して日本集中治療医学会から市民の皆様への提言

日本集中治療医学会は集中治療室（ICU, Intensive Care Unit）において重症病態の命を救うための集中治療を使命としている医師・看護師・臨床工学技士など多職種の医療従事者で構成されています。私どもは集中治療に日夜全力投球していますが、高度医療を駆使しても命を救うことのできない医療の限界があることも経験します。このようにどうしても死を避けられない医療の限界を超えた「終末期」が存在しますが、私どもはこの終末期に関しても豊富な知識と経験を持っています。日本集中治療医学会は集中治療室における終末期の判断や終末期医療のあり方に関しまして、皆様に適切な判断をしていただくために提言致します。

### 医療の進歩と限界について

近年のめざましい医学と医療の進歩に伴い治療の限界が大きく変化し、従来救命不可能だった命が高度医療で救えるようになってきています。さらに今後も医療は大きく進歩するでしょう。一方、医療において絶対確実な診断法や完全な治癒を保証する治療法はありません。同様に、治療効果や病気の予後、そして余命を確実に推定する方法もありません。医療には限界があり、この限界を超えれば完全な治癒の保証はもちろん命を救うことも不可能になります。この状況では医学と医療の全てを駆使しても人は死を免れることはできません。このような終末期の存在を認識していただくことが重要です。

### 終末期医療をより深く理解していただくために

#### 1) 終末期の判断と終末期医療の選択

入院後の経過の中で病状を繰り返し確認し、複数の医療従事者の経験と知識に基づいて医学的に終末期と判断します。人生の終幕を迎えるにあたっては、本人、家族、友人などがその状況を受け入れるための時間も必要であり、終末期の判断を性急に行わないことが重要です。死が避けられないと判断されたとしても、終末期は必ずしも「生きている価値がない」ことを意味しません。終末期において、人は死をあるがままに受け入れることができますし、死に到るまで最善の医療を受けることも可能です。

終末期から死までの期間をどのように過ごすか(どのような医療を選択するか)は、本人の意思が尊重されます。意思が表明されていないか、正確に確認できない状況では意思を忖度します。意思が表明されていても終末期の時点での意思が確認できない場合は、現時点での意思を推定します。いずれの場合も忖度あるいは推定した意思内容を尊重し、私どもと家族が十分な時間をかけた話し合いを行いお互いの理解と同意に基づいて本人にとって最善となる終末期医療を実施します。

## 2) 事前の意思表示

人は必ずこの世を去る時が来ます。そして大半の人は病気を経て病院で死亡します。皆様が、日頃から自身で、あるいは最愛の人とともに死について考える機会を持ち、その過程で自身がどのように人生の最後の時を過ごすのかを事前意思として表明しておくことを推奨致します。かかりつけ医などに助言を求めることも良いでしょう。事前意思表示は、個人的意思表明として最も尊重されるものです。事前表明された意思は何度も訂正できますし、撤回可能なこともご記憶下さい。

### 日本集中治療医学会による終末期医療への取り組み

日本集中治療医学会は、2006年8月に会員に対して「集中治療における重症患者の末期医療のあり方についての勧告」を公表しました。同勧告は、終末期医療の選択肢として一般的に考えられる4つのパターンを提示しています。このパターンが終末期医療の全てを網羅しているわけではありませんが、その選択に際しての参考にして下さい。

- a) 現在の治療を維持する(新たな治療を手控える)
- b) 現在の治療を減量する(全て減量する、または一部を減量あるいは終了する)
- c) 現在の治療を終了する(全てを終了する)
- d) 上記の何れかを条件付きで選択する

日本集中治療医学会は、2011年3月に「終末期医療に関わる医師・看護師のための臨床倫理問題に関する教育講座」を開講しました。同時に、看護師の観点から終末期にある患者および家族のこころのケアを行う看護師養成のための「終末期患者家族のこころのケア講座」を開始しました。日本集中治療医学会は、終末期医療の知識と経験を持つ集中治療専門医およびこころのケアを実践する看護師の活動を通じて終末期医療に直面した皆様と家族を全面的に支援致します。

日本集中治療医学会および同倫理委員会は、この提言を契機に広く皆様の中に集中治療における終末期医療のあり方について考えていただく機会が増えることを期待します。

日本集中治療医学会  
理事長 氏家 良人  
日本集中治療医学会倫理委員会  
委員長 氏家 良人  
担当理事 丸藤 哲